

雪の赤岳、初めて登る

報告者 Kawa

◎山行期日 2017年3月10日～11日

◎メンバー Naka (L)、Kawa

山は、春か夏、もしくは秋に登るものと決めてかかっていた。冬の山は恐ろしすぎて小生如きの近付く所に非ず、との考えを頑なに守って来た。そんな私が、ひよんなことから冬の赤岳に登る事と相成った。Naka 大先輩が雪山初心者の私を訓練して下さると言う。3月だから最早冬山とは言えないかもしれないが、雪はたっぷりある。

3月10日(金)、あずさ1号を茅野駅で下り、そこから美濃戸口まではタクシーで行く。美濃戸口までの距離は意外と近くあつと言う間に着いた。美濃戸口からすぐに歩き始め、凍った林道を必死でリーダーの後について行く。

雪山初心者の私の装備はと言うと、アイゼンは、以前シリウスのバザーで買ったもの、ピッケルは、友人から亡き主人が残したのですが良かったらどうぞ、と言われて頂いたもの、ヤッケと手袋はNakaさんに一緒に行って貰って石井スポーツで購入したもの、ズボンは、ワークマンで購入したもの、見かけによらず暖かい、サングラスは、100円ショップで買ったものと多少まともなゴーグル、ストックは、最近先っぽの金属部分を新しく取り換えたばかりのもの、GPSはガーミンのtrex30、使い方が未だ万全でないがトレースだけはとれるので道に迷った時、今来た道に戻るのには使える。

凍った林道は結構歩き難い。僅かな登りだがよく滑る。「アイゼン付けましょうか・・・」と言ったがリーダーにその気配なし。これも訓練かと諦めて怖々歩く。上から下りて来る人はアイゼンを着けている。帰りは絶対アイゼン着けようと心に決めた。何とか美濃戸に着いたのは11時。ここで栄養補給、駅売店で買ったおにぎりを食べたのだが、ザックの外ポケットに入れておいたので冷えて美味しいと言いはない。栄養補給の後、少し歩いて登山路に入ったのが12時、相変わらずよく滑る。途中1回足が滑って思わず手をついてしまった。それでも最後までアイゼンは使わず1時過ぎには赤岳鉱泉に到着。

小屋の前には巨大な氷の柱、アイスクャンディーと言うらしい。確かに昔食べたアイスクャンディーを思いっきり大きくしたのを立て懸けた姿だ。本日の予約客は30名、部屋は空いている。小屋には随分と早く着いたので、ベッドは一番端っこ。後で聞いたことだが、翌日の予約は200名とか、空いているときは気が楽だ。泊まり客が少ない所為か乾燥室に火が入らないのはチョット残念だが混み合うよりはましだ。

ベッド横でロープワークを教わる、先の雪上技術実地研修で習った確保の方法の復習だ。表に出て、適当な傾斜が無いので平らな場所を斜面に見立てて実地訓練を受ける。滑落した時の対処法についても教わる。「直ちにピッケルを打ち込み、足はアイゼンを雪面に引っ掛けないように上げる。ピッケルは常に打ちこめる体制をとっておくこと」と言うのが基本のキらしい。なるべく使う事の無いようにしよう。

小屋の中は意外と暖かく感じる、しかし気温は結構低いらしい。廊下に干しておいた濡れた手ぬぐいが凍って1枚の板になっている。突然、「焼けてます、焼けてます」の声につられて小屋を飛び出すと、既に何人かのカメラマンが構えている。カメラの先を見ると、赤く染まった横岳がすぐそばに見える。



暫し夕焼けを堪能して後の夕食は美味、少なくとも一人暮らしの私が作る料理よりは上等だ。する事もないので早々に就寝、寒くはない。

11日(土)、4時半起床、昨日同様本日も晴天、無風、予報では晴天ではあるが風強し、との事であったが、晴天の部分は当たり、風強しの部分は外れ、良かった。朝食は、東京から持参した焼きおにぎり1個、食欲なし、寝不足の所為かも。風が無いので予定通り地蔵尾根に向かって5時半には出発、今日は最初からアイゼンを着ける。少し歩くと暑くなってきた。着過ぎた。簡易ハーネスを一旦解いて、1枚脱いで、またハーネスを作って・・・、手間取らせてしまった。身体は暑いのだが、手だけは冷たい。手袋の中で手をもぐもぐ、もみもみするのだが一向に暖かにならない。困ったものだ。

腹が減って来た、おにぎり1個では無理もない。1個ずつ2回も食べた。その都度ザックを上げ下ろしするので時間の浪費が甚だしい。それでも我がリーダー、厭な顔一つ見せず根気よく付き合ってくれた。服を脱いだりおにぎりを食べたり、その度素手になるので手だけが冷たくてなかなか暖かにならない。

地蔵の頭直下のトラバースも若干緊張したものの何とかクリアする。地蔵の頭での眺望は抜群。地蔵の頭を過ぎて、足の付け根辺りがピクピクして来る。完全に攀ってしまう前に薬を飲まなきゃ、ポケットを捜すも薬が出てこない。68歳になってからは常時用意しているツムラ68が出てこない。止むを得ずリーダーに貰う、直ぐに効いてきた。9時過ぎ、赤岳頂上に到着。小屋を出てから3時間50分、私の実力からすれば上々だ。頂上は四周絶景、遠くの山々が蒼い空に映える。今登って来た道を振り返る、よく頑張ったものだ。

重たそうな大きなカメラを抱えたカメラマンが次々に登って来る。もう少し山頂に居たかったのだが、カメラマン諸氏に頂上の一等地を譲る。山頂にて若干の栄養補給の後、下山開始、



下りは登りよりシンドイ。体力的には楽であるがそれ以上に気を使う。頂上直下の下りはザイルを張って貰う。遥か下の方が目に入ると怖〜い気がする。こういう時は谷底を見ない。見たくないものは見ない方が真実を知るより幸せな事も多い。リーダーが前を歩いてくれると安心感がある、リーダーの影になって下の方が見えないのも良い。

10時20分、文三郎分岐に到達、階段は雪に埋まって見えない。左右の足交互ではなく、身体を横向きにして左足ばかり先に下りる、左足に次いで右足も同じ場所に下りる。左足だけが疲れて来る。登って来る人を待つ。すれ違いざま「有難う」と言ってくれる。こちらは一休みできるので「有難う」と言う。11時チョット過ぎ行者小屋到着。振り返れば赤岳が光り輝いている。

小屋の前で昼食を摂って下山。登りは北沢を通ったが帰りは南沢だ。林道に下りてきた頃にはスタミナも切れてきた。勿論アイゼンは使った。易しいリーダーと好天に恵まれ良い山行が出来た。



雪山は、天気が良くて風が無く、厳冬期以外の暖かい時、雪崩の心配も、自分が転がり落ちる心配もなく、ホワイトアウトなどと言う意地悪な事も無く、勿論ラッセルの苦労も無く、岩の露出でアイゼンを引っ掛ける心配も無く、傾斜も然して急ではなく、夏道のゴロゴロ石や岩や木の根っこも雪が隠してくれて、「自分の歩幅で自由に歩いて下さい」と言ってくれる時、雪山は、夏山より歩き易い。

《記録》

1日目：美濃戸口 0942-1059 美濃戸-1203 林道終点-1312 赤岳鉱泉

2日目：赤岳鉱泉 0525-0616 行者小屋-0916 赤岳-1020 文三郎分岐-1107 行者小屋 1142-13:09 林道-14:04 美濃戸

口